

国

語

(60分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、  
左記の注意事項をよく読むこと。

### 注 意 事 項

- 1、問題冊子は、22ページまであります。
- 2、解答用紙は問題冊子の中央にはさんでいます。解答はすべて、解答用紙に書き込みなさい。
- 3、始め、の合図でページ数を確認し、受験番号・名前を書きなさい。
- 4、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。印刷のはっきりしないところがあれば、静かに手をあげなさい。
- 5、時間を知りたいときも、静かに手をあげなさい。
- 6、具合が悪くなったり、トイレに行きたいときは、手をあげて監督の先生の指示に従って行動しなさい。
- 7、問題冊子は、各自持ち帰ってよろしい。



問題は次のページから始まります

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、字数制限のある問いは、句読点や記号も字数にふくみます。)

2012年末、取材で\* Bangladesh の農村を訪れたことがある。日本企業が手がけるソーシャルビジネス(社会的事業)を取材するためだった。

村では、日本から新聞記者が来たということで大騒ぎになり、村中といっても過言ではないほどの人たちが出て迎えてくれた。やぎや鶏が我が物顔で村を歩き、子どもたちが裸足でかけ回る。私の頭に浮かんだのは、先進国ではなかなか目にするこのできなくなったその素朴さに対する、率直な賛辞だった。

「すぐくのどかで、いいところですね」

そんな感想を口にした私に、事業を手がけてきた日本人の男性はこう返した。

「本当にその通りです。でも、災害だったり、病気だったり、ちょっとしたことが起きただけで、彼らの暮らしはたちまち、立ちゆかなくなる。この素朴な暮らしは、とても危ういものなんです」

私は、新しい出会いの高揚感にだけとらわれ、安易な言葉を口にしてしまったことを恥じた。

その時はそこまで頭が回らなかったが、当時の写真を改めて見返してみると、集まっていたのは男性ばかりだ。今回、Bangladesh の事情について改めて調べなおしてみても、これは女性が1人で買い物にすら出られないという Bangladesh シュならではの事情も絡んでいたのだろうと思う。

倒壊した\* ラナプラザで犠牲になった人たちは、こうした農村から都市部の工場に働きに出ていた人たちだ。農村では、現金収入を得る機会はとても少ない。「次の世代の教育のために」、そんな思いが彼女たちの支えになっている。

「Made in Bangladesh (メイドイン Bangladesh)」。最近そんな\* タグが付いた洋服を、よく見かけるようになった。観光国ではない Bangladesh について、日本ではイメージできる人は少ないだろうし、足を運んだことがあるという人

も少ないだろう。この洋服を作った人が、どこで、どんな暮らしをしているのか。想像することが難しい世界に、私たちは生きている。

大量生産の商品は、顔の見える誰かが作った服に比べれば、価値が低いもののように扱われている。もしかしたら、生産に関わっている本人も、何万もある工程の一つを担っただけの商品に対する愛着は薄いのもかもしれない。生産にかかわる人たちも、消費する側も、「簡単に捨ててよい」という感覚になってしまふ。

移り変わる流行に合わせて、服を簡単に取りかえられる生活は、私たちが豊かにしたのだろうか。

最近、たくさんものに囲まれた暮らしに対して、\*疲弊しはじめたという声も聞くようになった。「買う」という行為は、人をハイにしてくれる。「ほしいものが手に入った」だけではなく、「他より安く手に入った」「お得感がある」「他の人と差別化できる」「とりあえず在庫を確保して安心する」など、理由はいろいろとある。だが、家に帰ってその蓄積と向き合うと、「なぜこんなに買ってしまったのだろう」と罪悪感が募り、捨てきれずにあふれたものを前に、げんなりする。そんな経験を持つ人は少なくないだろう。

いいものを、安く。それが、<sup>X</sup>これまでの賢い消費者だった。

だが、その先にあったのは、\*不毛な価格競争だ。同じ品質で、同じ技術で作られる製品の価格を下げるには、働く人の賃金を削っていくしかない。同じ国内での競争が一定の水準に達すれば、次はより賃金の安い国へと発注される。<sup>②</sup>ある国では仕事が失われ、別の国では苛酷な労働環境に耐えながら働き続ける人たちがいる。

地球環境への負荷も大きい。資源には限りがあり、いつまでも\*潤沢に使えるわけではない。また、\*大量に捨てられるものをどう処理し、コストをどう負担するかも大きな問題だ。こうしたことから目を背けていけば、そのまま、私たち自身の住環境や、健康問題として跳ね返ってくる可能性がある。

いま、世界中でグローバル化に「NO!」を突きつける人が増えているのは、経済が発展し、ものが売れて数字の上は「豊か」になったといわれていても、暮らしの中で実感できなくなり、こうしたシステムを続けていくことの限界を肌で感  
じているからだろう。

④では、消費者として、私たちはどうしていけばいいのだろう。「買わない」という選択をすれば、それで解決するの  
だろうか。

茨城大学の長田華子教授は、「不買は幸福をもたらさない」と訴える。たしかに、Bangladeshの縫製工場には多くの問題がある。だが、だからといって私たちがそこで作られた服を買うことをやめてしまえば、彼女たちの労働環境が改善するどころか、工場への注文が減り、彼女たちの給与が下がるだけでなく、最悪の場合は仕事を失ってしまう可能性もあるからだ。

「私たちに問われているのは、これまで990円で売られていたジーンズの価格を、5円でもいいから値上げすることを  
受け入れられるかどうかなのです」

その5円を、現地の人たちの給与や労働環境の改善に使うよう、企業に対して声をあげていくことも、もちろん必要だ。

グローバル化が進んだ時代の\*メリットの一つは、情報も手に入れやすくなったことだ。インターネットに言葉を打ち込むだけで、これまで知らなかった国々の現実のことも、知ることができる。試しに、「Bangladesh \*Apple」とGoogle検索してみると、\*NGOなどのサイトで、現地の人の暮らしのことや、労働環境について知ることができる。もう少し詳しく知りたいと思えば、\*スタディツアーなどの形で現地に行くこともできるだろう。さらに、私たちがどう向き合えばいいかについても、様々な提案がなされ、議論がされている。

技術の革新を人類にとってプラスのものにするか、マイナスのものにするかは、使う側の意識に左右される。一度に大

量にもものを作ることができる技術。作ったものを運ぶ輸送力。人やものをつなげるインターネットの力。人類の知恵によって生み出された技術をどう生かすかも、人類の知恵次第だ。

そのための一歩が、知ることだ。目の前にある「安い服」は、どうやって生み出されているのか。買われることもなく捨てられてしまう服は、その後どうなるのか。自分が知った後は、誰かに伝えてみてもいい。そこから、一緒に何かできることはないかと考えてみてもいい。

知ろうとする人が一人増え、さらに変えようと一歩踏み出す。それが少しずつ増えれば、いまの方向性は変えられる、と信じることは、あまりに楽観的すぎるだろうか。

でも、そうすることでしか、変えることはできない。<sup>⑥</sup>大量廃棄社会の現実を変えられるのは、私たち一人ひとりなのだ。「いいものを、安く」ではなく、「いいものを、適正な価格で」。それが、Yこれからの賢い消費者の姿だ。

(仲村和代・藤田さつき『大量廃棄社会 アパレルとコンビニの不都合な真実』による)

(注)

\* バングラデシュ……南アジアに位置するインドとミャンマーに国境を接した国。

\* ラナプラザ……2013年に、突如倒壊した商業ビル。多くの縫製工場が入り、ビル倒壊の危険が指摘されていたが、操業を続けたために倒壊、多くの従業員が犠牲になった。

\* タグ……衣服に縫い付けられている原産国などの表示。

\* 疲弊……心身が疲れて弱ること。

\* 不毛……何の進歩も成果もないこと。

\* 潤沢……ものが豊富にあること。

\*大量に捨てられるもの……追加で作ったり保管したりするコストを下げるために、一度に大量に作り、売れ残ったら捨ててしまうことを、筆者は問題視している。

\*メリット……利点。価値。

\*アパレル……衣服産業のこと。

\*NGO……利益を目的とはせず国際的な活動を行う民間の協力組織。

\*スタディツアー……途上国などでNGOが行っている活動の現場を訪れ、現地の視察や見学を行うことを目的とする

ツアー。

問1 傍線部①「安易な言葉」とはどのような言葉ですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 災害や病気などに弱いという途上国の悩みに思い及ばず、目に入った素材だけをほめた言葉。

イ 人によって感じ方は違うということを忘れ、相手ものどかだと思うだろうと決めつけた言葉。

ウ 素材そうに見える暮らしにも豊かな文化があるはずなのに、のどかの一言で片づけた言葉。

エ 日本人にとっては危険な暮らしであることに気づかず、いいところだと言いつけた言葉。

オ 事業のおかげで村がよくなったにもかかわらず、そのことに少しも触れなかった言葉。



問2 傍線部②「ある国では仕事が失われ、別の国では苛酷な労働環境に耐えながら働き続ける人たちがいる」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア これ以上は技術を上げられないというところまで技術開発が進み、製品の品質が一定の水準に達すると、製造会社はその国での事業を中止し、より高度な技術を求めて別の国で事業を始めるから。

イ これ以上は耐えられないというところまで労働環境が悪化し、人々の暮らし向きがひどくなってくると、製造会社はその国での事業を中止し、労働環境の比較的良好な別の国へ移転しようとするから。

ウ これ以上は使えるものがないというところまで自然を切り開き、地球環境への負荷がかかり過ぎると、製造会社はその国での事業を中止し、まだ残っている資源を求めて別の国で開発を進めるから。

エ これ以上は下げられないというところまで賃金を下げ続け、それ以上製品の値下げができなくなると、製造会社はその国での事業を中止し、より低い賃金で人々を働かせられる別の国で製品を作るから。

オ これ以上は値段を下げられないというところまで価格競争が進み、一定の価格以上で売れなくなると、製造会社はその国での事業を中止し、より購買力こうばいのある消費者を求めて別の国で製品を販売はんばいするから。

問3 傍線部③「こうしたシステム」とは、どのようなシステムですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 低価格を追い求めた結果、環境破壊と廃棄物の問題が深刻さを増し、環境の維持が不可能になるシステム。
- イ 経済が発展した結果、たくさんのもを手にして物質的には豊かになったが、精神は満たされないシステム。
- ウ 低価格を追い求めた結果、多くのものを購入できるようになったが、ものが大切にされなくなるシステム。
- エ 経済が発展した結果、物質的な豊かさを追求する欲望に歯止めがきかなくなり、ものを買いつけるシステム。
- オ 低価格を追い求めた結果、労働者の賃金は下がり、有限な資源を損ないつつ大量にものを捨てるシステム。

問4 傍線部④「では、消費者として、私たちはどうしていけばいいのだろう」という問いに対し、解決策の一つとして、どのようにすればよいと、筆者は言っていますか。七十字以内で答えなさい。

- 問5 傍線部⑤「5円でもいいから値上げすることを受け入れられるかどうか」とありますが、長田教授はここでどのようなことが言いたいのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。
- ア 5円の値上げを受け入れ、それでも生活レベルが下がらないように、経済を成長させるべきである。
  - イ 自分の利益だけを考えず、商品を作る人の賃金や健康を改善するために、値上げに応じるべきである。
  - ウ 海外で働く人々と連携し、その生活を守るために、賃金を5円上げることが企業に求めるべきである。
  - エ ジーンズを購入する際に、品質の向上に必要な値上げに関しては、進んで受け入れるべきである。
  - オ 有限な資源を守るために、商品を値上げた分のお金を、積極的に環境保護運動に回すべきである。

問6 傍線部⑥「大量廃棄社会の現実を変えられるのは、私たち一人ひとりなのだ」とありますが、現実を変えるためにはどうすることが大切だと筆者は考えていますか。七十字以内で説明しなさい。

問7 波線部X「これまでの賢い消費者」、波線部Y「これからの賢い消費者」とありますが、両者の違いを説明したものであるとして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア これまでは、流行に合わせて安価な服を買い換えていくのが賢い消費者であったが、これからは、知識を蓄えたうえでものごとの本質を見抜き、高くても質のよい商品を手にするのが賢い消費者である。
- イ これまでは、少ない出費でよりよい商品を買うのが賢い消費者であったが、これからは、価格が設定される背景の事情を知ろうと努めた上で、必要な経費に理解を示すことができるのが賢い消費者である。
- ウ これまでは、地球環境への負荷を考えてたくさんものを買わずに賢い消費者であったが、これからは、私たち自身の住環境や健康問題との関連まで考慮した上で購買活動をするのが賢い消費者である。
- エ これまでは、経済の発展に貢献し、次々とお金を使うのが賢い消費者であったが、これからは、現在のシステムを続けていくことの難しさに向き合い、問題のある商品は買わないのが賢い消費者である。
- オ これまでは、より低い賃金で働かされる人々が作る製品を購入するのが賢い消費者であったが、これからは、労働者に対して最大限の賃金を支払っている会社の製品を購入するのが賢い消費者である。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお字数制限のある問いは、句読点や記号も字数にふくみます。)

私達の中学では、三学期の初めに百人一首を使ったかるた大会がある。あらかじめ各クラスで男女一組の代表を決めるための予選を行うのだが、班ごとの勝負を重ねた結果、女子では私とミナセとが代表の座を争うことになった。

ミナセはとても大人しい子だ。授業で当てられた時以外で彼女の声をほとんど聞いたことがないほどだ。休み時間に自分の席で本を読んでいる様子はいかにも文学少女という雰囲気、加えて彼女の\*所作は、立ったり座ったりといったなんでもない動きまでもが、思わず見惚れてしまうほど優雅で綺麗だった。成績も良く、\*才媛という言葉は彼女のためにあるんだな、なんて思ったものだ。私もクラスで三位以内に入る成績だと自負しているけれど、ミナセのほうが上なのは明らかだ。恐らく学年全体でも一位か二位かといったところだろう。

所詮、成績なんて志望高校に合格するための手段であって、誰より上だとか下だとかそんなことはどうでもいい。けれど、すごい人が同じクラスにいるとやはり気にはなる。私は空き時間にクラスの奴に頼まれて授業で分からなかったところを教えることがよくあって、結構誰とでも気にせず喋るほうだけど、ミナセとは会話する機会が全然得られなかった。だから、このかるた大会の予選がきっかけで少しぐらいは話せるようになるかな、とか漠然と思っていた。

[I]

しかしいざ勝負が始まると、余計なことを考える余裕は吹き飛んでしまっていた。

A

とした普段の様子からは

想像できないほど、ミナセの手さばきは容赦がなかった。札を取る動きそのものは私のほうが若干速いようだけど、彼女はその完璧な記憶力で、全ての上の句に「\*決まり字」で反応していた。

負けたくない、と私は思った。彼女に追いつこうと必死で耳をそばだて、目を凝らした。取られて、取って、取って、取られて、気がつけばミナセの持ち札はあと一枚きり。私の陣にはまだ三枚も札が残っていた。

先生が「接戦だね」と笑ってから、次の札を読んだ。「\*ひとつもをし……」と。

しまった、出遅れた。そう思った瞬間、背中に汗がふき出した。けれどミナセはまだ動かない。私は自分の膝のすぐ前にあった『世を思ふゆゑにも思ふ身は』に手を叩きつけた。叩きつけて、そのまましばらく動けずにいた。

今のがミナセに取れないわけがなかった。ミナセなら「ひと『も』」で取り札に手を伸ばしたはず。まさか、目の前の札を取られたら私が傷つくかもと気を遣った？ 手加減した？ カットと全身が熱くなり、こめかみが鈍く痛みだす。

怒りにも似た思いを、私は残りの札にぶつけた。ただ夢中で、次も、その次も、私が取り札を弾き飛ばした。「委員長の逆転勝ちだ！」と気安い連中が囁きたてる中、何故か私は、ミナセの顔を見ることができずにいた……。

## 〔II〕

山の斜面に建つ常寂光寺の境内は、階段と坂だらけだ。鐘楼の土台に乗ると、木々の遠くに町並みが見えた。更に高い場所にある多宝塔まで行けば、嵯峨野を一望できるに違いない。いつそその上の展望台まで登ろうぜ、と盛り上がる男子に、残りの班員も口では文句を言いつつ、いそいそと移動を開始する。

振り返ればミナセはまだ鐘楼の端っこに、こちらに背を向けて佇んでいた。

何を見ているのだろうか。尋ねようにも喉の奥に言葉が引っかかってしまい、私は結局「もう皆、次に行くよ」とだけ口にした。せつかくミナセと落ちていて話ができるチャンスだったのに、と自分の馬鹿さ加減に密かに B を囁む。突然の呼びかけに驚いたのか、ミナセが勢いよく背筋を伸ばした。ビクッと震えた彼女の手から何かが跳ね上がるのが見えた。受け止めようと慌てて伸ばした両手が、あろうことかその何かを更に前方へと弾き飛ばした。

茶色っぽい、手のひらぐらいの大きさの何かは、大きく弧を描いて落ちていく。鐘楼の向こう側へ。枝々が絡まり合う斜面の下へ。微かな鈴の音とともに、小さな虹色の、流れ星のような軌跡を残して。

ミナセが土台の縁から身を乗り出すのを見て、私は思わず「危ない！」と声を上げていた。振り返ったミナセは、愕然

とした表情をしていた。血の気の引いた顔でじつと私を見て、……でも彼女はなにも言わずに目を伏せた。

「どうしたの？ なにかあった？」

「なんでもない……。なんでもないの」

彼女の声が微かに震えている。私は、得体のしれないざらざらとしたなにかが胸の奥からせり上がってくるのを感じた。それを必死で飲み込むと、何も気づいていないフリで「皆もう先に行ったよ」とだけ言って\*きびすを返した――

### 〔Ⅲ〕

苔の斜面に桜の花びらが点々と貼りついている。顔を上げれば、校外学習の時にはあんなに寒そうだった枝が、新芽に彩られて生き生きと風に揺れている。

鐘楼を見上げる急斜面の下で、私は深呼吸をして息を整えた。テレビで見た構図を思い出しながら上のほうの枝を順に探していく。やがて、斜面の中腹、地面から三メートルほどの高さに、何かが引っかかっているのを見つけた。

くすんだ茶色が保護色となって枝と同化しているが、くたつとしたタイプの小さなぬいぐるみだ。あの丸い耳はたぶんクマ。首輪に鈴がついている。

ミナセが落としたやつだ。そう頷いた瞬間、鈴がキラリと虹色に光った。

うちの中学は、勉強に関係の無いものを持ってきてはいけないことになっていた。筆箱や鞆にキーホルダーをつけるのさえ禁止。ぬいぐるみなんて余計なものを校外学習に持ってきたとバレたら、きつと\*内申に傷がつく。……そこまで考えて私はゆるゆると首を横に振った。いいや、違う。ミナセは、単に皆の手を煩わせたくなくて、落とし物のことを言い出せなかったのだろう。

### 〔Ⅳ〕

私は再び枝を見上げた。

もうずっと、このことが気になっていたのだ。三年でミナセと別のクラスになっても、中学を卒業しても、ずっと。あの時私が声をかけなければ、彼女が何かを落とすことはなかった、と。そればかりか、あの時私が変な意地さえ張らなければ、落とされた物をあの場で捜すことだってできたはずだったのだ……。

私はあらためて状況を確認した。お寺の人に頼んで、箒か何かを借りることができれば、なんとかぬいぐるみに届けることができそうではある。しかし斜面を絨毯のように覆う苔は瑞々しくて美しく、これを土足で踏み荒らすのはもつてのほかだと思われた。ならば上から、斜面の縁から箒を伸ばして……。

[V]

あれこれ悩む私の背後で、誰かが立ち止まる気配がした、

まさかの声が、おそろおそろといったふうに私の名を呼んだ。

びっくりして振り向くと、両手を口元に当てたミナセがそこに立っていた。

「ごめん！」と開口一番私は彼女に謝った。「実は校外学習の時、私、ミナセさんが何かを落としたことに気づいてて。でも何も言わなくて本当にごめん」

そもそもあの時、と続ける私を遮るようにして、ミナセが首を横に振った。

「何も言わなかったのはわたしのほうだから、どうか気にしないで。それに、あの時キノさんに声をかけてもらわなかったら、迷子になっていたと思うし」

[VI]

一年前と同じ、僅かに目を伏せたままミナセが\*訥々と話す。私が何も言えずにいたら、彼女は両の手をぎゅっと握って、そろそろと顔を上げた。

「……キノさんもあのテレビを見て、それで、ここに来てくれたのね……」

ほんの一瞬目が合ったかと思えば、彼女はまた視線を下方へ彷徨わせる。

「あのぬいぐるみは、『安心毛布』<sup>⑥</sup>みたいなものだったの。わたし、コミュニケーションをとるのが下手で、皆とどう話せばよいのか本当に分からなくて、ああすればよかった、こうすればよかった、って毎日家に帰ってから後悔してばかりで、そのたびにあのぬいぐるみに話を聞いてもらっていたの」

また彼女の視線が私の目を掠める。いつの間にか私も両手を握り締めていた。

「校外学習で、キノさんが同じ班になろうと言ってくれてすごく嬉しくて、でも不安で、いけないと思いながらも守りのつもりで持ってきてしまったの」

「ごめん。そんな大切なものだったなんて……。本当に、ごめんなさい」

「ううん。勝手に持ってきて勝手に落としたわたしのせい。あの時、あの子が飛んでいったほうを目で捜したけれども、どこに落ちたのか全然分からなくて、まるで煙のように消えてしまったみたいで、もしかしたらあの子は『C』  
と言いたかったのかもしれない、って思ってる……」

そこでミナセは、大きく息を吸って正面を、私の目を見た。

「あれから少しずつ、少しずつ、頑張ってる、そして今日、キノさんにこうやってきちんと話しかけることができて、良かった、と思っています」

そう言う彼女の眼差しは、まだ微かに震えている。でもそんなことが気にならないぐらいに、強い、強い光が彼女の瞳に宿っていた。<sup>⑦</sup>

私は思わず自分の胸元を手で押さえた。私が校外学習でミナセを同じ班に誘ったのは、かるた大会でのことを尋ねたかったからだ。だが、どうだ。私はただ自分勝手に拗ねるばかりで、未だもやもやをこねくり回しているだけだ。

一度目を閉じて、それから私は真つ向からミナセの視線を受け止めた。



「あ、あの、ミナセさん、私どうしても気になっていることがあるんだけど」  
必要以上に彼女を不安にさせたくなくて、私は息継ぎも早々に話を続ける。

「二年のかるた大会の予選の時のことで、もう憶えてないかもしれないけど、あと一枚つてところでミナセさんの動きが鈍ったことがすごく心に残ってて」

私の心配をよそに、ミナセはふんわりとした笑顔で「ああ」と手を打った。

「体育祭のダンスの曲を決める時に、クラスが二分して揉めたことがあったでしょう。クラス委員長だから、つてキノさんが率先して皆の意見を上手くまとめくれたけれど、その前の日の放課後に、わたし、教室に一人残って考え込んでいるキノさんを見かけていて、すごくつらそうだな、つて思っていて」

話の出発点も行き先もさっぱり理解できなくて、私はまばたきを繰り返す。

「かるた大会で後鳥羽院のあの歌が読み上げられた瞬間、下の句よりも、あの時のキノさんの姿が思い浮かんできて……」  
と、ここでミナセは恥ずかしそうに足元に目を落とした。「責任感が強くて、いつもみんなのために一生懸命頑張っている、そんな素敵な人と、わたし、今、一対一で勝負しているのね、つて感動していたら、あつという間に逆転されちゃつて、びっくりしたわあ」

ミナセが頬を桜色に染めて微笑む。でも私のほうがもつと赤い顔をしているに違いない。照れくささのあまり、私は頬を押さえてその場にしゃがみ込んだ。

ミナセと二人で寺務所に行き、事情を説明して竹竿を一本貸してもらうことができた。\*作務衣を着た年配の男の人が「私が取ってあげるよ」と言ってくれたが、私とミナセが声を揃えて「自分達で取りたいんです」とお願いすると、その人は「では、私も立ち会おう」と笑みを浮かべた。寺の人間が傍にいたほうが、他の参拝客になにかと誤解されずに済むだろう、とのことだった。

万が一でも転落することのないように、私がミナセのGパンのベルトを後ろ側で掴んで重石となる。いざ、と竹竿を構えたミナセが小首をかしげた。

「あれ？ こちらからだど、見えない……？」

「あー、手前の木の陰に隠れてしまってるのかー」

どれどれ？ と立会人のお寺の人も、左右にひよこひよこ頭を動かしている。と、斜面の下から知らないおじさんの声が響いてきた。

「茶色いタオル？ いや、人形か？ なら、その太い木の右側だよ！」

「もうちょっと左に立って、棒の先つちよを、こう、下へ動かしてごらん！」

見れば、下側の坂道で、数名の参拝客がこちらを見上げて手を振っている。

ミナセが私を振り返った。それから彼女は唇を引き結んで大きく頷いた。

「そうそう。もうちょっと下、もうちょっとだけ下！」

「頑張つてねー！ 落ちないでねー！」

ミナセを後ろから支えながら、私は奥歯を噛み締めていた。胸の奥が燃えるように熱くて、はち切れそうで、力を抜いたら泣いてしまいそうだったからだ。

「やった」という声や皆の拍手とともにミナセがぺたんこ座り込み、私も一緒に尻もちをついた。即座にお寺の人が竹竿を引き取って、ぬいぐるみを確保する。一年もの間風雨にさらされたせいで、ぬいぐるみの布地はすっかりガサガサになってしまっていた。ミナセは、それを愛おしそうに両手で受け取った。

⑨ 来てよかった、ありがとう。同じ言葉がどちらからもなく零れ落ちる。舞い散る桜の花びらの中で、私とミナセは顔を見合わせて笑い合った。

(那識あきら「しづ心なく」による)

(注)

\*所作……身のこなし。しぐさ。

\*才媛……頭が良く、才能のある女性。

\*決まり字……歌が読まれたときに、その歌を特定できる字(音)のこと。

例えば、百人一首では「す」で始まる歌は「すみのえの」という歌しかないので、「す」という一字(音)を聞いただけで、下の句がわかり、札を取ることができる。

\*ひともし……後鳥羽院が作った歌で、「時に人々を愛し、またある時は、人々を恨めしく思う。この世をつまらないと思うからこそ、もの思いにふけるのだ」という意味の歌。この歌を含めて「ひと」から始まる歌が複数あるので、「も」まで読まなければ下の句が決まらない。決まり字は「ひと」である。

\*きびすを返した……ひき返した。あともどりをした。

\*内申……進学希望先に提出される個人の成績や行動の記録。

\*訥々……言葉が途切れがちでたどたどしい様子。

\*作務衣……お寺の僧そうが着る作業着。

問1 A、Bにあてはまることばとして最も適当なものをそれぞれ次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- |   |   |      |   |      |   |                       |   |                     |   |                     |
|---|---|------|---|------|---|-----------------------|---|---------------------|---|---------------------|
| A | ア | しつかり | イ | ほんやり | ウ | のろのろ                  | エ | がやがや                | オ | おっとり                |
| B | ア | 手    | イ | すね   | ウ | 唇 <small>くちびる</small> | エ | 髪 <small>かみ</small> | オ | 爪 <small>つめ</small> |

問2 傍線部①「余計なこと」とありますが、それはどういうことですか。二十字以内で説明しなさい。

問3 傍線部②「背中に汗がふき出した」とありますが、このときの「私」の様子を簡潔に説明したものととして最も適当

なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 敗北は思いもしなかったので、啞然あぜんとしている。
- イ 勝負に集中して、無意識のうちに緊張きんちようしている。
- ウ 失敗に気がついて、焦りあせと後悔とを感じている。
- エ 惨敗ざんぱいして、悲しみのあまり泣きたくなくなっている。
- オ 出遅でおくれたので、どうすべきか真剣しんけんに考えている。

問4 傍線部③「血の気の引いた顔でじっと私を見て、……でも彼女はなにも言わずに目を伏せた」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 斜面の下にいる人へのけがをさせるかもしれないと心配しつつも、自分がしてしまった失敗が信じられず、ぼう然としていたから。

イ こっそり隠し持ってきた大切なものを落として、ショックを受けながらも、何をしているのかを聞かれなくなかったから。

ウ 鐘楼の土台から転落しそうになり命の危険を感じながら、自分をこんな目にあわせた「私」に対して、怒りを感じていたから。

エ 近くから大きな声で「危ない！」と呼びかけられて非常に驚き、改めて身の危険を感じて、心の底から恐怖を感じたから。

オ 鐘楼から下をのぞいてはじめて自分が今いる場所の高さを知り、落としたものはもう取り戻せないと、あきらめようとしていたから。

問5 傍線部④「あの時私に変な意地さえ張らなければ」とありますが、これは「私」がどうしたことを表わしていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 嵯峨野を一望するために、坂や階段を登ってまでみんなを多宝塔まで連れてきたこと。
- イ ミナセが寺の雰囲気を楽しんでいたことがわかっていても、次の所に向かわせたこと。
- ウ ミナセが言いたくなかったことを知っていたのに、どうしたのかと無理に聞いたこと。
- エ ミナセが何かを落としたことに気づきながらも、そのことには直接ふれなかったこと。
- オ ミナセがクマのぬいぐるみをなくしたことを知りつつも、気づかないふりをしたこと。

問6 傍線部⑤「ミナセがそこに立っていた」とありますが、ミナセがここに来たきっかけは何ですか。最も適当なものを、次のア～オの中から選び記号で答えなさい。

- ア 寺の境内でたまたま「私」の姿を見かけたこと。
- イ 以前落としたぬいぐるみがテレビに映っていたこと。
- ウ 中学時代のことがなんとなく懐かしくなったこと。
- エ 「私」と話をしたことを思い出して会いたくなったこと。
- オ 「私」への不信感をぬぐうために後をつけていたこと。

問7 傍線部⑥「『安心毛布』」とありますが、同じような意味で使われている言葉を、本文中から三字で抜き出しなさい。

問8 Cに入る表現として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア ぼくにもっと頼たよってもいいんだよ
- イ ぼくに少しぐらい頼たよってもいいよ
- ウ ぼくに頼たよってばかりでは駄だ目だよ
- エ ぼくがきみに頼たよりたいぐらいだよ
- オ ぼくよりもむしろ彼女に頼たよりなよ

問9 傍線部⑦「強い、強い光が彼女の瞳に宿っていた」とありますが、これはミナセのどのような様子を表わしていますか。四十字以内で説明しなさい。

問10 傍線部⑧「照れくささのあまり、私は頬を押さえてその場にしゃがみ込んだ」とありますが、そのときの「私」の心情の説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」がミナセに対して自分勝手な思い込みをしていたにもかかわらず、そんな「私」のことをミナセはこの上もなくほめてくれ、心の底から恥ずかしさを感じているから。

イ 「私」がミナセに対してもややとした気持ちになったのは「私」のせいではなく、自分の勘違いが原因であると「私」につげるミナセの優しさに、うれしさを感じているから。

ウ 「私」がミナセに対してまるで子どもみたいにすねていても、それを責めることなく許してくれたミナセの寛大さにくらべて、自分の心のせまさを情けなく感じているから。

エ 「私」をほめちぎるミナセの言葉は、すべて事実でもなく彼女の本心でもないと分かりながら、思わずうれしくなったことが恥ずかしくて、いたたまれなく感じているから。

オ 「私」よりもミナセのほうが恥ずかしそうにしている姿を見ると、口に出せないような恥ずかしい気持ちを彼女にいただいていた自分のことが許せなく感じているから。

問11 傍線部⑨「来てよかった、ありがとうございます、この言葉から考えられる「私」の気持ちを、解答らんに続く形で七十字以内で説明しなさい。

問12 本文を三つのまとまりに分けた場合、二つ目と三つ目はどこから始まりますか。〔I〕～〔VI〕の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。



三 次の傍線部のカタカナを漢字に書き改めなさい。

- ① 交通安全のヒョウゴを作る。
- ② 代表としてシラハの矢が立つ。
- ③ メンミツな計画を立てる。
- ④ 入り口の係員に荷物をアズける。
- ⑤ 書店でシュウカンシを買う。
- ⑥ メイロウ快活なリーダーとなる。
- ⑦ 時代のチヨウリュウに上手に乗る。
- ⑧ 専門のリョウイキについて深く学ぶ。
- ⑨ 熱が高いので、家でヨウジヨウする。
- ⑩ 新作のドウワを読む。



2022B1

↓ここにシールを貼ってください↓

# 国語 解答用紙

受験番号							
名前							

問 2    問 1    二    問 7
問 6    問 5
問 4    問 1    一

A	□	□	問 7	□	問 6	□	問 5	□	問 4	□	問 1	□
	B										問 2	□
											問 3	□

⑩	⑦	④	①	二 三 目	□	三 三 目	□	⑧	⑤	②	問 12	□	問 11	□	問 10	□	問 9	□	問 7	□	問 3	□	
				二 三 目		二 三 目					問 11		問 12	問 10	問 9	問 7	問 3	問 8	□	問 4	□	問 5	□
				二 三 目		二 三 目					問 10		問 9	問 7	問 3	問 8	□	問 4	□	問 5	□	問 6	□

ここに感謝している。